内閣文庫
和書
類 一八四七八
冊 一〇
函 二〇二
架 九

内閣文庫
和書
類 一八四七八
冊 一〇
函 二三三
架 一一

内閣文庫
番號 和 18478
冊數 10 (3)
函號 202 193

国立公文書館
National Archives of Japan

浅草文庫

冠辭考巻三

加紀久氣古

○加部 十一

かんうぜの　風れとの　かぎろひれ

うーの實れ　うりごもれ　かきつばた

かをじもの　かこじもの　うぐひす

かぢれおとの　うきかぞよ

○久部 六

くもゐなる　くれなゐ　くれなゐ

くはまくも　くさ〳〵　くれなゐ

○古部　十二

このくれやと　こもりくれ　こもりづの　又こもりぬの

こゝがくを　ことさへぐ　えをの　立つあり

えをを　こもまろ　こもだくと　又やへくと

こまつるぎ　こもひこれ　うがそれ

冠辭考卷三

加紀久氣古

○加部

かんうぜの　いせの國

古事記よ。神武天皇大御巡加年加是能伊勢能宇美能。垂仁紀よ。是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也。萬葉集卷一よ。神風乃伊勢處女等云云。卷一卷四卷十三又も同しくだけり。

こハ神風の息とりよぶきを異きて。伊の一字よりしけるなり。ゆゑに神代紀よ。我所生之國唯有朝霧而。熏滿之哉。乃吹撥之氣化爲神。弥曰級長

戸邊命、亦曰級長津彦命、是風神也、と云て、風ハ天津神の御息なれハ、神風のいきとハいふべきなり也、級長ハ即息長の云なるべし、志部よくふ、さて万葉卷二よ、高市皇子尊の殯宮時、人万呂、長哥よ、天武天皇、伊勢国よ御坐て御軍ひきのさせたまふことくを、神風尓、伊吹惑之、天雲乎、日之目毛不令見、云、こハ大の吹撥之氣なくの語なりとて、これハ伊吹ハ即息吹のきを異きしるなり、大祓詞よ、氣吹戸主云、神根國底之國尓氣吹放牟、といふ、氣吹とハ、いとのようなり、くなと一語よ云なり、

冠辮の伝ハ下よ云ふ、神風の冠辮、公式級長戸邊ト云つくて、吾友橘枝貞、もはらこれひとり、夢て夢のなかよる時ハ、神の考ふ、かりなり、

仙覺ハ風土記を引て、伊勢津彦の神風を起して信濃國へ去しより、神風の伊勢とハいふと

一一を、契沖ハいふ、神武紀を考るよ、戊午の年の十月よ、八十梟帥を國見の丘よて擊破る時、かんなびの、いせの海のたなくやいくくひかりくる、とくるこの云、此天皇兎田の下縣よ到給ふハ、同年七月なるよ、それより天日別命、東の數百里よ入て、伊勢津彦を平げたまふを、十月よ、ようやくて天皇、やがて神風の伊勢とよませ給ふなり、信濃ハ、真湖ありよ、風土記ハ古き書といふ、諺なるもの、ようくれバ、泥むべくぬ抽ちるとハ、仙覺ハまぐくて、ようにりて、契沖ハ諭ひ、ようこいくれて、信濃ける、さて神武の大御事と紀の語などよりて、その後

よハ只伊勢にのミ冠らせことせんのより多くハ志らず。
賢人が青ぐよりしるされハだゞ平也とかへとる詞なる
をぞ詞りひきられてハ既ならのなれしくなりてあとに
よしくぬちともにあるが如く後にハ非風といへハ伊勢の國
のうすの桜にのみなりけり。ことをきかずよもが

音をとハ虫とも云ふ。の葬弓に弭 夜音の遠音 といふがゆし

かせのをと

萬葉巻十四に。東哥 可是乃等能登抱吉和伎母賀吉
西斯伎奴多母登乃久太利麻欲比家利。この
古事記に。天稚彦の身まかりける時 下照比賣之哭聲與風響到天てふ流
て風の音乃遠きをはつぐるなり。これらくとも物のあはれ
風よりて遠くつぐる物なれハ。まで遠くよそにきこえん料の

冠りていづれにしても防人が流をに至るほどハ東より
吹風をとせめて妹がきるづれすしてあかきえのとありて成ゆ

かぎろひの

春 かゆ 一め 花のう
冬きり 日 いそ

萬葉巻六に。炎乃春爾之成者云云。かぎろひのひそ。伊の必くとのすうハ音使へ。この
かぎろひハ春のよろしかくかげろひつゆの物をいふ。
さて其そ安よりくして晴たる春の天乃さかなれハさる
ら春に冠らせでりよなるんされど此詞の本ハ火のけれ
きらめくよりいてかのそらに遊ぶるものハ猶そかぎろ
ひとりにやさるの火気をいつるハ古事記に。履中天皇難波より大和いでまして道より
春の日に難波の宮に火のつきしるとを。加藝漏肥能毛由流伊弊牟良都麻賀伊

弊能阿多理、万葉巻二ニ、香切火之燎流荒野尓、また
晴火之燎流荒野尓、云云、けにつは莽の火之、ちと也、且この加藝漏
肥、香切火などよめるよ伝よ、かげろよ火てゆるなるを、
ふを置きて、かぎろひといつるなるべしさて此歌茅渟
ハ假字なれ、ハ、右の古支記ニ伝て加藝呂肥
能とよめり、さるを中比ろハかげろのしいるもろのふハ火のまの揺ゆるもの
とこゝ迄ぎれ、巻二十ニ蜻人蘆火焼くてゆるを、安之布ゑ気賜毋と
よめるも、肥と布を
通ハしれハちろ、

○巻八ニ、晴蜻髣髴所見而、別去者、巻十二ニ玉晴、
髣髴所見而、往兒故尓、云云ちどよめるハ火けのかぎろに
ちくるよ、この晴蜻、玉晴をハ訓を借るのみ、

○巻一ニ、玉晴、夕去来者、巻十ニ、玉晴、夕去来者、巻
十三ニ、往影乃、月文経往者、玉晴、日文累念戸鴨、云云、
ハ日の氣れきゝめくをいつり、夕日ハこよ火けのか
くなれバ、ゆくつ、

○巻二ニ、玉晴、磐垣淵之、云云、こハろを打バ火のなるなり、
磐とハ、けさゝえゆ、又巻十ニ、玉蜻、直一目耳、視之
人、故尓てよし、石の火ハ、ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく、云云、又ろの火ニ
てゆくかけろひさんハかくもいるべし、

右巻一の玉晴、夕去来者と、巻十三の玉晴、日文累とを
ハ、ゆくゆくニ玉限とて、たまきはるとゆ訓れど、たまきはる

とて夕とも日ともつけ例となく所ともなくこハ結
の草を後の人陪よ語りうんすれどもなれバぬめつ何で
なれバ巻九よ玉情とて右と同じく夕去来者とつけも
外方よ挙しめく玉情情火情蜻蛉などをかげろひ
とゝゝるを對くこハ疑ひなうん
○情蜻を情火とハ赤楽が死を火のめくんたりてが
ぎろひとゝバなるべし。さて古事記よ宮よ火つきさるを
も万葉よ苺の火をもかぎろひとゝつゝ伝よさるハ火
なり。拾れバ情蜻をかげろよ火とゝるをしくんハほなれ
どそゝ又ゝやき時の消ゝるなよ万葉よハ情蜻の訓と

かゝるもゝなるべし。又玉情とも字ハ情蜻ゞ同ハ字
よ玉のめくゝゝゝゝを玉よ埴おけバ珠となるゝ
博物志よいるなどのゝゝゝゝゝゝゝゝ。且ゝ孤よ字を
墨きて書ハ字ふれ方也。

かゝのこれ　ゝゝ

万葉巻九よ若草乃夫香有良武檀實之獨欤將
宿云云。椎の子なぐハ張りて結ぶを檀の子ハ疎く一で
なる拙なよゝ寝ゝ寝よ也。ゝ世ゝゝ鹿兒自物吾獨子
とよゝる類なり。

かりごもの　なひぶれて

万葉巻十一に。苅薦之思乱而可死鬼乎。此ことば集中に多し。こハ苅
らる薦のまだおまぬハ乱ともやすくなれバいふのよ。さて此こも
ハ真薦草まて。わらうて清うらにあさへにされバ。古へよりあ
ミそ盛りのとおるらん。韓子に黄帝為蔣席頼縁とい
つるも同じ蔣也。

かきつばた　にほへる妹　恋る

万葉巻十に。寄草　垣津旗丹頬合妹者巻十一に。垣幡丹
頬経君叫。云云。こハ燕子花の艶ひやかなる色を妹に譬
へ巻一に。紫草能。尓保敝類妹乎。巻三に菌花香君之
なども此。歎也。香ハ借字　んかほへるとハ。集中に翔は新也

つるにもあるべく。古へハなへても色の臨むをいひて。香とも
好りにハまれまいへり。○又此丹頬合とあるをとハ。古れ某乙一。
其云のあまもくて小あへるとハ訓より。されどされづらよて
心語を挟丹頬経妹。雑豆臘漢女ともかきて。十字に丹津
蚊経色丹。名著来といひつれバ。今をもおつらに妹よし訓
ずべし。こし艶ひある訊ぞをいへバ同じえも。
垣津旗ハ借字也。荷田大人ハ東万呂翔燕花ほに亮とく
いちしげよさら秋の花あざつるる。

かもどりの　うきねとすれバ

万葉巻一に。藤原の宮づくりにさてる民が　鴨自物水尓浮居而。云云。こゝ

その宮材を田上山よりきりて川より宇治のかはへ流
しけるをいはひ民らが宇治にて取て筏とする時ながれ
よりてこゝを鳥と鴨の身あるにたとへたり。巻十五に可
母自毛能宇伎祢乎須禮婆と海路の旅に船にあるをり
をよめるがごとし。自物のうへハ説よりいふ。

かてどもれ　むとくくて　ひとりして

万葉巻九に秋芽子乎妻問鹿許曽一子二子持有
跡五十戸鹿兒自物吾獨子之草枕客二師往者巻
二十ニ可胡自母乃多太比等里之手云々こハ奥山人
伊勢物語の古本に獨子とあれ俗のまゝにひとり子とよむ下ぐさなるひとつごころハかくれなや。よつに廉ハ子一つ二つとむすめのといへり。されバ子のいとまなく

登にあげて人の獨子にハ冠せさせる也。又歎にハひとつごへにハひとつごとゝ何ならに上ハひとつでトハひとつごと訓し

からころも　きなれの山　又なる衣　きなれの里

万葉巻六に難波の宮にいでませる時によめる四首が中
韓衣服楢乃里之嶋待尓玉乎師付牟好人欲得。こハ衣を身に著馴をてふえに
て楢山に着なれといひかけたり。東中に大和の布留川を
かきくらし雨ある川摂津國のつが路を吾妹子を聞継
野べなどいひつゞける歌まゝて古あれ多かるつけざる也
笠着ともに難波の地をよめる上ハあれねど此度に後篤にて叔てのまゝちとよを難波宮とも論にあまりの事にさり新社第にまかり難波にかはれ著楢山といふまるがごとくいへるハかなちなし。

○又巻十二に舊衣著楢乃山尓鳴鳥之云々これにつゞ

けるはハ右と同し。さて此の今ハ憲衣とまを〳〵舊
衣と改めつ。そのかハ高れてゐるハ沒りと例となるせ。
高ぞる人の名ととなんあるハ且打つけよ高衣〳〵
いとんと古ゑるあ〳〵ぜ。ふる衣とハ久しく云ものせ三
沒りまでをいひけるあるて。舊衣又打山なとしつけ
し敷ゐるを代。高と高と草のはれ仙れハ後の人乃ち
語れる事ゆゑ。

或人高衣とゑに沒りて新衣とを
ひ衣〳〵のゑ
ものかとゑ人
の中ゑハ片沒
ゑゑゑれ。

島待ハ島松とて。ふ良なる家れの池島のなとりゆな
らん。島の宮乃ゆよハあ〳〵ぜ
かぢのおとれ。つぐ〳〵ゆよ

万葉巻十八ゆ。越中国射水郡のゆまうまゆの行ゑかきつけし。安佐妣良伎伊里
江許具奈流可治能於登乃都婆良都婆良尓吾家
之於母保由。こハ既ゑ巻し。濱茅原つぐ〳〵ふゑの。
へバ。ゆりさとれおもゆるうゑてゆゑ同じくてつが
らハ委曲てゆゑ。さて甚驛館ゑゑゆきうゆ新のか
ぢぐられ松ぐゑゆゑ。つぐ〳〵ゆつ〳〵ひまなき
と。故郷思ゆれ志けきゑ。〇かぢとハ万
葉ゆハ人うの槽をいひて。今のかぢてゆ物ハ直ゆ。ぜ。ハ十
梶懸とて二梶といるゑ志れ
かきのぞゆ

万葉巻十六に。家持越中の国にて 可伎加蘇布敷多我美夜麻爾。云云。こハ集中に百さしぬといひてハ五十とも八十ともいひ。百伝ふとても五十とも八十ともつゞけしを思ふに一つ二つより十まてハ数かぎりなければ。ことなる事数ある意にて かきさぬに二つといふてつけしなるべし。かきさハうらみなどいふ又目しく数語之。日本紀に。日本武尊の辰言れ来るを火ミもしても侍ふ老人ぐつぎこたへ。伽餓奈倍氐用珥波虚々能用比珥波苔鳴伽鳴とつゞけしも似たる意あり。

○久部

くもゐなるん こぼきなれいざるれ

万葉巻三に。隼人乃薩摩乃迫門乎。雲居奈須。遠毛吾者。今日見鶴鴨。こハ天雲の向伏極てはやく。白雲などの居するハ近くてハみえねバ遠くよりぞ見ゆる物なれバものごとく遠きとハつゞけたり。巻四にそしけやし。不遠里を雲居にや。恋つゝもをらんといひて雲ゐを即遠き詞ともせし。

○又巻三に。雲居成心射左欲比。云云。てハ中空などに居る雲ハたゆたひてさだめなければ。心のいさよひせんといはんとて又ミそらにうかべる天雲にたとへて心のさまに用ゐし。盛ハ如の意るを既へあり。

くれなどり あや

後撰和歌集の恋に。おほやけづかひにておほまのくさへかのまかりけるに。たゞしめてあひもりて侍りけるに女かくやむごとなき人あれバ心にもあらでまかりけるたびかへりてくだり侍りけるをなげきあそびめのさかさめさだめらぬかあそびめしたるに。これハ学女中にて悦びなげし向につかはしける

それをとりハ　みちうて人のんざ一おくりて仕りかるれたもうりと
さきさとむでしりよきあ　をかさもうてうてつくハーるる。清原清家　それたり。あや

よ　ま　一くあるうらバ。みるさひやまも。こえぢなりのきさこ
ハ　呉のくるり物の綾　ひけりけるり。應神紀雄略紀などに。
呉の国より来りしハ呉　たくさおくぐも。こよハ人よハあ
らで呉さる機織の後ぎぬをりのこさて。あやよ　ま一く
ふハよよいつるごとくいとめくく　ま　なぐるいをりも。呼ぶハ経糸をや
ぐてまれ巧ゝして二村山とときぬ二匹よりやさりが振よりうなりて
ゆハよつ代よハなり。奈良の朝よりかつくいして今の郡人ハまるゝ。

二村山ハ和名鈔よ尾張國山田郡両村布多無良とあり。詞
花集よハ参河國の二村山とうけるゝ。りハ國の境なるど
よりてかなるこたなくよりるるあやくるぐよ。ぐ一。

くしろつく　たゆのさき

万葉巻一よ。伊勢国よりでまた時。釧著手節乃崎二今毛可
ゑよ　毛大宮人之玉藻苅良武。この釧ハ古る　釧よ纏物まて。
その臂ハ手の節なれバ釧を著るゆゑ　しハいひけり。
巻九よ。流紫へまるる時。吾妹児者久志呂尓有奈武左手乃
振田向宿祢。吾奥手尓纏而去麻師乎。とよこ一と思ふ。荷田大人
東万ハいそれ　せさて釧ハ古事記よ女島王所纏御手之
玉釧。和名鈔よ備中國の郷よ釧代久志呂。なくしひ万
巻よハこゝにあまさ久志呂とよりて。ゆるを今なよ
を釧著と　てたちいきのく訓るハ字より訓り誤り。和名

説文ニ釧臂環也。此ハ呉ヨリ乃
ちまるるハ数
ぐくしまるる遊仙
窟ニ黄龍透
黄金釧。陸法言
若ヶ金或三為之穿
ヶ扁。其釧上鏤為
龍形。所以懸脆故
然也。皆尺絹反。

釣よ釣をは和万伎と訓るハ考ハさるすちぐ〜語ハ條よなれ
ることのせちの佐久々志呂玉釣ちどの條よりみをむくべよ。

手節崎ハ和名鈔よ志摩國答志郡よ答志郷あり。

くさまく〜　たび

万葉巻一よ草枕客尓之有者云云。こハ巻五よ道乃久
麻尾尓久佐太袁利志婆刀利志伎提てよごくるあ川信
びて枕とゆるゑよて。弦よハ冠〜ゆるなり。此しと舒明天皇の御代を考へる
にいひなれ〜でけ根なれバ
と上つ代ゆいつる羽なり〜。

○巻十四よ上野安我古非波麻左香毛可奈思久佐
麻久良多胡能伊利野乃於久母可奈思母。今ハよトの久を久よ誤れり。
こハ既よいひなれて草枕を即旅のよもなるべし。青

よよ國内などいひなれ。又ハ稀よハくるこてよ弛をめて
ゆくなよこそをを畧きて。たごくづけるや。
此多胡の入野ハやぐて上野よあるべ。

草づゝ　やしひ

万葉巻六よ石上乙麻呂土佐国よ流さるゝ時或人。草管見身疾不有急令憂
賜根本之國部尓。こハ流〜やるゝ〜むよて。づゝひあ
らせぬ〜てどやく伽しるべて。よ稀よ稀のるあむしろよ
ありてよ虫の名を冠〜めるう。身疾二字をけづゝひ
あ〜ぬと訓るべも侍れど。次よ久〜孤りもし孤よ孤のふ
よれバ不有をあ〜ぬとよむべきなよよをやりひと訓

此集中にうらむることいふべき所をやむことにいへる
事もあればなり○草管見ハ説文に恙ハ蟲名入腹食人心
古人草居被此害故相問無恙乎とみえたり、巻五に
よくゆきてよく　都々美無久佐伎久伊麻志弖速帰坐勢
とし又集中につゝがなくとよめる所に無恙とかけば即是
なり。又巻二十に防人の別を痛む歌に事しをればも都々麻波受久ありまてと
に唐詩に布帆無恙挂秋風などいへるハ、ことでありたきことをいひ得せる物なり

くれなゐ　あさぞめの事

万葉巻十一に紅之浅葉乃野良尓苅草乃云云これハ巻
十二に紅薄染衣浅尓まとひ　桃花褐浅等乃衣浅尓　と
歌によみてあるもいへれども紅にハ浅きかうすくもなれぞ

つけたり、巻十六に紫乃粉潟の海にかづくハ濃さとか
かれるもとおくへしてみよ。
浅葉野ハ巻十二にもよみたれど何の國とみえず。ここにや
ぞ、和名鈔に武蔵の入間郡に麻羽波　安佐　あり。はま遠江
の佐野郡小山麻葉の庄あり。万葉名所集といへる地小信濃
とぞ。歌枕に浅芽のはら
いづれを写されど、浅茅と
浅芽といへるも同しかるべし

○古部

こゝくれやみ　うづき

万葉巻十九に許能久禮罷四月之立者欲其母理
尓鳴霍公鳥云云。これハ夏のはじめ、茂みふのしたの暗きをいふ。

本の下暗といふに同じ。羅ハ借字 巻十八に。多胡乃佐伎。許能久禮之氣尓保登等藝須。とあるハ。木の暗の繁きよしてなり。是三十にハ。桜花木晩茂尓とよめりて。昔ハ春山春の花跡なども。あるに花さきよしみぬれど夏までてこそ木暗こきまではあれバ四月に発しめつ。

こもりくの　はつせ

古事記に。允恭條。軽皇女 許母理久能波都世能夜麻能。まうし許母理久能。波都勢能賀波能。日本紀に。雄略天皇泊瀬の小野まで山野のあそさはどえんこそなハして。峯暮利矩能。播都制能野磨播。継體紀よも 万葉巻一に。隠國乃。泊瀬乃川尓。まう隠口乃。泊瀬之山。巻三に。隠久乃。始瀬乃山爾。巻十三に。隠来笑長谷之河。まうこ母理久乃。泊瀬之河之云云。ありてなどさまざまに書るをこてよ。ここハ古の隠國とかるぞ正しき字なりける。山のそこころ弘くかこえる所をまバ。籠り國の長谷といふべきものも。國を久といふハ。吉野の久濡を國栖と書がごとし。○日本紀万葉などに初瀬の國。初瀬小國とよびけり。難波の國吉野の國といへる類なり。○又此ハ左右つ山ありて内ハ長く廣くて入つき口の狭ければ。隠り口のともいふべてなるべしとうしむべし。されど既前なるぞ古き意たるべきさ。後の人古き事をしらずに假字まてよみのやうにまうさまいし。隠口をかく書くようこその口の字を泊に借りてこうけさようにいへ泊の泊を立波都曲とよむるはしおもぶてここまでとよめるなどハ嫁りてもれ人のこぞなる。

万葉にハ借字に多かれば正字とにくさありことによりて見べし。

長谷とよめるハ古事記にあり

こかりづれ　ちさとそ〳〵て

古事記よ（仁徳條）夜麻登幣迩由玖婆多賀都麻許母理
豆能志多用波閉都〻由久波多賀都麻（天皇吉備國より還らせゆよ時）
黒日売ゆ献こ二首の中。こハ皇后の注妬ゆよ志のひて。正ひめゆ
ましてかつ〻せ給へハ隠水のゆるぐ〻つとハたゝ〻なりう
ゆぐ〻ハ伊勢物語古今よ夜這と出ゆ取物語ゆもよゆるかさ
をこゝなぐ〻まて思ひてつまゝひもるといつ。万葉巻十
一よ隠處澤泉在石根通念吾戀者。處の字ハこのゝし訓を且
者よ喝へられバこゝハづよ　その〻訓ゆまとハ古へ〻づの
今年ゆ出ゆ注ニト用ゆる文度と處と語ゆ。同巻よ隠津之澤出見尓有石根從
遠を遠とゆハ
音語也。
毛透而念君尓相巻者。この二首ゆつ〻遠られゆ通ゆ

同歌なるよ。たの記のおを参へられバこゝりづハ隠水也。
されど記ゆハ草なゝよこゝりて乃水よ出ゆ乃水を出ゆ
て冠梓也。万葉ゆなるハ冠梓なるねど語れ例ゆひけ。
○又巻二よ（人万呂）隠沼乃去方乎不知舍人者迷惑こハ上
よ埴安乃池之堤之とあれハ。巻十六よ水たまる池といつる
ゆ〻ゆく堤ゆこゝりるをいつゆ。伊勢物語よ隠江とゆゝ〻
其條を考るよ。新撰記の苦よこゝりる水をいつれハ上と同一意。
こらゆよを　まきむく山
万葉巻七よ。兒等手乎（巻向山者云云。同巻よ又あり）兒等とハ女
をいつゆさてそれゆよをまくして相寝るこゝを。此山

名よいひつけつ古事記日本紀などよいめづらをいれ
よまゝしめ給ふをいはゆまゝしめとよめるなどゝ
纒向山ハ大和國城上郡よあり纒向珠城宮とも日代宮を
もいひハ此ものも万葉ふよ巻目真木向などゝ
きてまきもくおきもこなどゝ訓るなど古事記よ麻岐年久
能比志呂乃美夜と姓氏録よ巻棹新撰万葉ふ眞木
年具之日原とゝ
ことさへく
万葉巻一よ人万言佐敝久辛乃崎有まゝ言左敝久百濟
之原巻十六よ佐比豆留夜辛雄尓眷云云こハかゝ人の言ハ

この人の耳よハりもてさくきてのこゝゆれハ人ゝ百濟さ
もづくゝハ新羅高麗そのかもひとの國よハ冠
らもてきも日本紀よ韓婦用韓語言とひ原氏飛鳥よ
海人のさへづりとひそるみさへづりと同一景行紀よいつる
佐伯氏もそのか蝦夷の喧譁より出るハ皆言のけすゝの
ちゝきをいふめり又神武紀よ其中原中国猶聞喧擾之響云云聞喧擾之響
哭左那東初示聲應神紀よ琴と其音鏗鏘而遠聆云云大御
哥よ同一琴の聲を左夜佐夜とよくの比祝詞よ御床都比無佐夜佐夜なこ
を八物の音ハ清きをいひて假字よ
八言のかちなく中ゆる方ゝそ假字よ夜伊田衣与の音りてくき古の言佐倍久
ちき風なれど五人ハよくふちゝ
假字よ波比布倍保の者を用ゐ
阿和淡ーきをハ阿波とまぎ
幸乃埼ハ石見國よあり○辛雄ハ韓臣也左部よ委し

衣での　ひたち

常陸風土記に此国ハ道路不隔山海てつゞきたるを衣手のひたちとはいふとあり又倭建命の東をめぐり給ふ時井を掘し水に衣の袖をひたし給ひしよりいふとも又つゞきハこの説の事はよくきこえて陪て入るまじく其説ハ久保

万葉巻九に。筑波山 衣手常陸國二並筑波乃山乎。云云。こハ在満がいへる。ぜさとづけたるんど。今考るに古ハ袖ハたゞ世ぞくて。そのちゞれハ手拱もする事をなんおもひ袂のくゞまをたぐるなれ。ひさしもるべし依てたの説ハとりがたし。和名鈔に襞積周禮註云。祭服朝服襞積無數。訓比多佐（之）八。裙にとりつけめど。神のひざのよりとしたりめぐれ此衣をとつづけるる條く戒てろねがきま名こさハ古への衣の裾をおくまつりねゆえたなるべし。衣を衣とつゞくるといふ人もあれど。ちゞハての條に契沖がいへるごとくゐる衣たどおるべきさゞ衣とし首ハ袖のなたなれバ袖を擣てよそすハ作しぬや。衣をそうち田のあとつづけるも又別なり。

ころもでの　たなかみ山

万葉巻一に。磐走淡海乃國之衣手能田上山之。云云。こハ二つ乃ゑおとも一つにハ衣よれ。とちきてよ袁そて田上といひけるかん。其たハ式の祝詞に手長乃御壽たど云て辭称あるもあれども。こゝハ神とハ衣がよなるころをそていへバ即衣のよもとかさねいへるなるべし。

皇朝の尺古へ数度改りたる中にも今の定より来良朝の半までハ衣服に大尺を用ひ延元式の頃よりて衣服に小尺を用ゐ

さて古への衣よれ狭くちゞりしコトハ続日本紀に和銅元年制自今以後衣襟口闊八寸已上一尺以下。随人大小為之。又衣領得接作但不得襟口空小衣領細狭とありしとあり。寳亀六年格に袍袖口闊五位已上一尺為限。六位以下八寸。

らず。続史の一尺と式の一尺二寸、凡同じきに仍て式に二尺二寸已正あり。史の八寸以上と云ふ誤ることなし。

云云。延喜弾正式に、衣袖口闊無間高下同作一尺二寸已下、くびくくらるかく狭くて且袂のありけもうくんるは、巻二十に、家持宮人乃蘇泥都氣其呂母云云。こはくくき袖つけさることなり。今の袍袖闊長保の官符に二尺八寸。貞治筆記に二尺八寸餘。武宣旨に二尺以下なるべしとて書きたり。

いつて、又人に別て時袖を振こと、光一の人万呂の妻と始めて、あまくさあるべしともうべ振ぐさうぐく絵くはあるとも、れくくてどくくる後云のかくくたで戻くはえもかりけれど、儀

禮疏に玉藻を引て其為長中繻揄尺注云、其為長衣中衣則繻袂揄一尺若今衣深衣則緣而已若然中衣與長衣袂皆手外長尺といふるよこのたへの袖もおりひやらきてゐもしてくべきあこおばきたり。○今一つは

衣ゐれ疊ゐてに云よいひけり長前よひざ〻うたぐるうしてでくてゐわく、たへの狭くもさ袖は名よさるべくれば、たくなくいどけ名くべきやさてたくなんたつを畧きそていらんはくでまるをとまるもくくのをそこのぼるなどりに執りてさでにもくるをきて張を畧き狩りたどくて遊うなつでくるは冠帽の名也。さるあよくうつなくるに名ゐ

あまるくよ伝
くなり

田上山は淡海國栗本郡小おる

衣ゐ乃　なざの川

万葉巻九に、名木河の辺衣手乃名木之河邊乎春雨吾

立沾等家念良武可。そもちさとりひらけざるれ。賀幾
叉岐なりれバ、絡めて那岐ともいふべし。又袖ハつゝまなれてな
ゆる物なれバ、和ぎといへるか。何にても冠のごとく、あつらへて。或説
に、旅にて袖ぬひて、衣をも濡らしてとりかへやといへり。
似たらバ衣をもとりかへきを、衣のまとて信もいふにこそ
はなし。此ようことを、名木河のうたとて、焱干人
母在八方、沾衣乎家者夜良奈羇印といへるを之うらめど
そハ二説を併へて先挙し、おきて、実ハ此詞によりあひて同時に
みえたるぶおほみなれる之名り。さて古の冠辞に一言によく通ひ
めでたきゆゑもあれど、よるへハさらになしめめ。

名木河ハ此ふたに鷺坂と宇治の名代間に載されバ和
名鈔よりも山城國久世郡那紀郷の河なるべし

衣手の　まくらことば

万葉巻十二に、衣袖之真若之浦之愛子地暇無時無
吾恋钁。こハ或人のいはく、たゞ右のよを見して云よく
いふなれバ、袖と同じくれ具しける物なれバまへにつゞけさ
るなし。今なりかに冠辞にまて云に猶ハ、こかりてわれハ、あるま
きこえてもいふものふつでりんするさしわりぬべし。此ちいハ係ある語といきりきん。こち
此まのゝ冠辞のかゝらんもかしけれど、なほつろちかひにおもひしるもたし
真若浦ハ、まろと或人ちいハ係る辞にて紀伊の若の浦

ちらんといつるよりくべし。能所をも、能所、食頃を
もいそぐがごとく、所と地のちがひもかめて、変化と
おく歌ひきなり。

ころもでは　はしりの衣

万葉巻十三に、挽歌の反歌に衣袖大分青馬之嘶音情有息常
後異鳴。ある人これを先今なほ大分青をあげと
よめるは、かの白馬節のみのよるは万葉に青馬とよめ、国史にも
青馬と書けども、毛つけの差はあれども、あげと云ふ
ものなりとぞ。今おほよそ青馬白馬なりのこと
うんぬんもをしき事、大分とは、出しよりかの、しとさ

の葉老サよ、水
をれかしのあいの
青馬を、多多人
ちさうちのとよ、
牧聚国史に仁明
天皇の承和元年、
光孝天皇仁和二年
まで青馬のよろこび

らんで、えゆりとあしげは白ければ神の白きとつきさうといへ
ど、白栲と、絹布の名ちるなほ、あつて衣の数ひは冠らせる
はのくさりなれど衣ほとて白きとつで、なんとは、ひくやう
えりくされは、ちつけさる例は、ぬ也、よりてのつよ。

景行紀に豊前国に到頑田国其地形廣大亦麗国名頑田也此云於保岐陀又豊後国風土
記に頑田郡と有と和名抄に同国の同郡と大分郡於保伊多と也、式三書と合せ
ば共に大きとりとつのこれいこの大分青も大きとよ白きとつもを。
ち古人の例の通ずとみるとぬけて大分青はまりとろ訓べし。六白と
真白は色異なるねはもの。衣もより八右の真若の條に云ひ。

国の前後と多八
長多ハ八ハ長よ
頑田も別地と事
ず。

右の書と白と白一と色とよりの歌
第一書中の白肩の條にいつるがわし。

衣ぶを　うちわの里

万葉巻四よ。笠女郎が歌二十四首の中　衣手乎打廻乃里尓有吾乎不知曽人者待跡不来家留　こハ契沖が云。管見抄よ衣をうちといひしなり。さるをもうちつゝの里山城といつるを按よ衣をハ袖也。衣うつとりよ云よつゞけバかゝ衣などいひ出くや。井廻の里とかけるハ舞などにかりまたもえうたもつゞけられ。巻十一よ。かゝちひの井廻前のいさゝ水ちゝかくれてのゝやワゞ高をもんくれをうつきみさまくゝあゝえハ。神なびの岡よ水れうづまく云ゝとひて遊せるゝやゝ。にうちゝの里とよめるよ文字も同ゝなれバうれをうちつゝ。

のくまとよゝてゞうちわの里も大和國神なび川のきゝとうゝべきゝや。山ゝろといつるハ上のあよとゞ山松れまちつゝて。ゐねのあうに行てさハよめるとなりつるなよさてゝ井ワの里も山城也といつるも。二十四首のうちよ。ふる山の小松ゞ下よ立かゞくゝかもとも。やなうゆく水ゝ。ゝゝせ川ゝいせの海ゝ。さまゞくよよめるゝものを。又大和よある人を山城のゐねのゐゝとよまゝんハいゝ。遠くやと

衣ぶを　たゝ

古事記の八千矛神の歌よ　黒ぬくたまくろ

万葉巻九よ。黒玉夜霧立衣手高屋於霏霧麻天尓。

きみけ(衣)を(填)
つ(具)さに(取)て(襲)

こハ神をたぐらとつでけ(なぐし)ふ集中よたけびぬれたが
そ(ふ)ぬ(漢)がきつ(烏)り(胸見時)
ねバもちきいそ(ぐ)髮ふ(弱)草を髮よさぎふ(古)今集よ
むらこ(ろ)こ(ろ)こきハ(手揭)
(蜘)(多)(熟云)(是)(不祥)
ハふさハす(ぬ)ぬ(ぎ)(きぬ)
(旅)(二)つ(ま)も(ハ)衣を
(ま)て自らつ(ま)よ
ハ(胸)のあ(ら)ら(と)
(袂)の(ら)ら(ら)
(絶)ぬれハ(胸)をえ
といひ(ふ)ぬ(ぎ)
(り)ら(ら)ま(を)見神
(ふ)

人の繩さざなぐもよあるハ(ぬ)ぐるてふ(法)ふ(と)(具)利
及(ギ)なれバ(約)てたぐと(ら)ふ(ま)ふ(ハ)その(幾)を加ふ(通)ハ
して多(タカ)加とつ(ぬ)ぬ(ら)ふ(ハ)倒の冠(裾)のひ(ら)けせ(ら)ゆ(見)云
かいつるぐ(ら)く(古)への神ハ(狭)くて(ち)ぬ(ら)ば(搭)ふ事をなるて

もたぐ(ら)ハ(ま)も(也)(これ)を(ろ)もてのとよ(ま)そ(ハ)(次)の(法)のことろ
なけれバ(ち)れ(條)ふ(伝)て(ろ)もてとよ(ま)ぬ

高屋ハ古支記ふ安閑天皇御陵河内古市高屋村
ふ(ま)(ら)(ら)ふ(ら)又他の紀神名式ふ(ま)よハ大和城上郡高
屋(ら)もあれバ(ハ)づれ(ま)や(此前ふ舎人皇子ふ献ふ(ま)(ら)ふ(ま)多
武の山ふ(ま)よ(ま)れバ(こ)ハその皇子の市和也

多武山八十市郡
ふ(ま)ら

とかひてまう(ふ)ふ(法)あ
ふ(市)和(ハ)ふ(ま)ぬ(ま)ぬ(ま)や
(ら)(ち)(ら)(ハ)(ぬ)
たうむもびの形

こも(ぬ)く(ら)

武烈紀ふ影媛(コ)茅(モ)暮(マ)摩(ク)矩(ラ)羅(タ)柁(カ)箇(ハ)幡(レ)志須(スギ)擬神樂寄ふ
し枕(ら)る(ぬ)の(ら)や(ら)(ら)三代實録ふ(清和つもとの紀)鷦(タカ)枕高御産(ム)栖
日(ビ)神社ともいて(ら)古(へ)蔣(ヒ)をいて枕(ら)ま(ら)ことハ万葉巻
せふ鷦(タカ)枕相(マキ)巻(レ)之(コ)兒毛(モ)在(ラハ)者社巻十四ふ麻(ク)乎(ラ)真(マ)母(モ)能(ノ)
於(オ)夜(ヤ)自(ジ)麻(マ)久(ク)良(ラ)波(ハ)和(ワ)波(ハ)麻(マ)可(カ)自(ジ)夜(ヤ)毛(モ)なぐふ(ま)ふて志
(同)枕(吾者不經哉)
らぐし(ら)ふ(ま)ぐ(ら)ふことハ日本紀私記ふ師説古以蔣
(ヒ)(ト)(ニ)(ラ)(ス)(ス)(ノ)(ニ)(ノ)
鳥枕云高之眼目須流故欲言高之始有此言乎と
いて(ら)ま(ら)ハ床の上ふ枕ハ(ら)ま(ら)ふ(ま)ふ(ら)ふ(ま)なれバ(ま)ま(ら)

なくするしるしとやあん又掃部寮式ニ大嘗宮の神坐の料坂枕
一枚長二尺五寸廣三尺料編薦一枚生絲一兩とゑ
或傳ニこの神床の八重疊の下ニ薦枕をうしなてる
くさといつゝ始れバ枕の方ゑるくて床の上斜なれバ坂枕て
ハ名もそれ也そゝ上つ代の卧床のさまなるべくれバこと
枕るしてもよしけゑなんゲゝもそゑゆ又楚辭九辯ニ古元舜皆有舉任分故高枕
而自適王逸註ニ安卧垂拱万国治也と云ハ此のことなるべ高枕ハ夜床垂
拱ハ昼座ニあるれ共ハ寝苦枕ナきて安〳〵ぬと世ゆるれバ
る床ニ安卧ニなると云枕ニしよとゆゆさて私記の説も此ゑニ近ゑれバこと枕
ゑしてよ也もようてあるうしとりつべきを異なのみこのまゝてい
まゞなもえしうぬ武ゑの神呪ニくちれて羽搏とさく
ちんるゝ生ゝおのつゝ和ゑるゝとそべきちゝ

高橋ハけゝゑれ始めゝ伊須能筒弥賦屢鳴須擬底と

てひびけゝれバそてゝよゝおのゝ名也万葉ニ十二
ニ石上振之高橋崇神紀ニ高橋邑人活目
ともだゝ〳〵ぐりのあゝて　八えゝぐゝみ　〳〵ぐりの心
万葉巻十六ニ薦畳平群乃阿曽我云云こハ編る薦ハ
ゑゑ幾重も積てかさゝゑるゝてゝのひゝえゝよいひうけ
ゝゝ焼太刀之隅付経事者とゝハ鞘
を隅てゝ身ニ付ゝゑ也九重などゝニ重をれてゝ〳〵ぐゝを
〳〵のゝもいつるハゝ〳〵巻十四ニ美奈刀能也安之我
奈可那流多麻古須氣加利衣和我西古等許乃敝
大思尓そゝとゝのゝまゝ巻十六ニ長韓国乃虎云神

やくしゃくんそ八頭とハけてそ。必八重をいつて
あるべき八ハいやのえくこ。

平生取尓八頭取持来其皮乎剝々弥尓刺八重畳
平群乃山尓云云こハ皮の畳を幾重も積しくくして
づけさ面ハ太る同じさて五人の乃しハ表中重裏と三重
ゐるを一つくしてそをいくくもおを八重をくとハりめくて
えくり古支記よ海神の宮にて美智皮之畳敷八重赤絁畳八
重敷其上坐其上まくの景行の條以菅畳八重皮畳八重絹畳
八重敷波上云云こハ重ハ除重れことなるこ。
この平群ハ氏也阿曽ハ吾兄にて九此類のいとゝおい
ぶたくしむ語と氏のよつけて場まるもけてあか
まくをそ語と異さ通ハ出て、かゞとハいつ。乗くハおこ
ちるせくこ

○平群山ハ大和國平群郡にあり。

こはつるぎ　わざくぶ糸　わがけ

万葉巻二よ伯劔和射身我原乃行宮尓云云こハ高麗
劔の環とづけて即刀のよがくの環也。越て他國のよハ
環のあるとてよをそしハる羣人れよりてづけーのく
式の伊勢太神宮神宝の中よ玉纏横刀一柄云云頭頂著什鐶一
勾経一寸五分玉纏十三町四面有五色玉こハ古く他ふう拵ふーを神宝よ奉ふーなり。

○又考十二よ高麗劔已之景跡故外耳見尓哉君乎
恵渡奈年この已之景跡を今ハよさぶかけと訓ーハ
此次よ劔太刀名之惜毛考丸よ劔太刀已之心柄ゐど
いるよりつくめど。そハ引也。今ハ右れ和射身とづけ

劔太刀えくハ都部よあぐ

たるに同じ冠帽よりつぎさるれば已之をわかちよく
て、奴の環といひけるもとなるべきもの。

和射身原ハ、天武紀ニ天皇云云到野上、美濃國不破郡、高
市皇子自和墾參迎などあるもよし。

こゝひらけ　やけのもの

万葉巻九ニ、常陸國鹿島郡苅野橋ニて其國司牡牛乃三宅
別撿税使大伴旅人卿時の長歌
之滷尓指向鹿島之崎尓云云、今なほ滷を酒に漬れてハいとをゝ
論語ニのゝ牽牛子騂ニて厩牧令ニ牸ハ卯若
解上ニ見ゆ
酒にしてくゝれ
くゝれ
うるかぬ
もの。

しるしの男子ニ、えこそひらけ、ハ和名抄
ニ特牛古度頭大牛也といひ、生ナ六ニも事負乃牛と
ものるなどをもて、大牛にて物を負ふ多く負

なるに負牛とこゝろさして厩牧令馬寮式ニ牛を考ふるに法花の牧り
細馬ハ、りゝうてゝよりきゝ牛をもゝ負ふり、且櫪飼繋飼放飼
寮飼國飼野飼などの名ゝ中ニ、寮飼ハ左右馬寮にて飼ふれば
それをみやけがひこゝやがひこゝやがひこゝ飼れゝこゝハこゝ
牛のゝやがひこゝつゝそて、三宅ニ代ニいひけるなり。
ゝこゝやがひこゝのがひこゝ、こゝや氣の氣こゝ地の通ふこゝ。加比爻ハ紀ニ見ゆ。二回通て氣こゝ
牧野こゝふこゝ馬飼野ニて拾ふるをこゝ今こゝ。

三宅ニて所ハ、ゝ、ゝあれど、ゝハこゝ紀のこゝやけこゝ。

こゝはそれ　みかるこゝ

万葉巻九ニ、上総国の末珠名娘子をこゝる歌
腰細之須輕娘女之其姿之

端正ニ云云ハ年十六ニ飛翔スガル為ゴトキ輕如來腰細丹ニ雄

書紀ニ蜾蠃ハ云須ラク先ハ似我蜂ニ化シテ蜂ニ

經ニ云ハ女ノ腰ノ細キ事ヲ化ノ如ト何

ナル王ノ腰ノ細キ事ヲ如ト女ハ腰ノ細キ事ハ如ト

ハ他ノ如ク細腰蜂ニ化シテ蜂ニ雌ハ先ヲ為テ雄ハ

巣ヲ為テ子ヲ養ヒテ七日ニ成レハ雄ハ子ヲ養ヒ

ハ他ノ如ク巣備ハリ

冠辭考卷三

国立公文書館
National Archives of Japan